群教セ	J10　- 01
	平15.213集

磨き合おうとする児童を育成する指導の工夫

――「伝えようとして話し、心を傾けて聞く」人権学習を通して――

特別研修員　　横山　みどり

《研究の概要》

本研究は、相手の人格を尊重しながら自分の気持ちを伝え合う学習を通して、友達とのかかわり合いを大切にし、磨き合おうとする児童を育てるための指導のあり方を明らかにしたものである。具体的には、人権意識の高揚を図る基本的な学習と、参加型学習による「言葉を介して伝えようとしたり、わかろうとして聞いたりする体験」を関連させ、日頃の生活の中でも相手を尊重する行動ができるようにする研究実践である。

【キーワード：人権教育　学級活動　磨き合い　アサーショントレーニング　参加型 】

Ⅰ　主題設定の理由

学校における人権教育のねらいは、子どもたちの発達段階や各教科等の特質に応じ、全教育活動を通じてお互いの個性を認め合う心、他人を思いやる心、正義感や公正さを重んじる心など、豊かな人間性を育成することである。そのために、社会生活を営む上で必要な知識・技能、態度などを確実に身に付けさせ、人格が形成される早い時期から子どもたちに人権尊重の精神の涵養を図ることが望まれる。

小学５年生という学齢は、心身共に大人に近づき、自分たちで考え工夫する自主性が伸び、創意工夫する力が備わってくるなど、自立が始まる時期である。しかし反面では、大人への反抗心が芽生えたり､友人関係が分化して閉鎖的になったりという不安定な心も併せもっている。精神的に未熟であるのに、固定化した友人関係ができてしまうと、小さな誤解から排斥や分裂を起こしやすいという特徴もある。そしてこれらの危険な側面が絡み合って学級崩壊やいじめを招くこともある。

本学級（小学校５年生　女子17名　男子18名）の児童は、全体的に落ち着いていてきまりを守るなどの道徳心はある。しかし、日頃の生活の中では、自分の考えを主張したり相手の話に心を傾けて聞いたりすることには無関心である。なんとなく生じた誤解から気まずい関係になったり、理解不足が原因のトラブルを起こしたり、悩みを抱える児童も多い。このことは、思いやりややさしさが知識として分かっていても､実際の場面において行動として結び付かない、つまり相手の立場を分かろうとする意識が不十分なことが原因と考える。

そこで、望ましい人間関係づくりのためには自分の考えを言葉によってはっきり伝え、相手の考えを共感的に聞きとることが必要であると考えた。「人権」という観点から「話す・聞く」コミュニケーションのアクティビティを体験すれば、お互いに理解し合う豊かな人間関係の基盤が作られ、自他を大切にする心が育つであろう。そして、多様な考え方があることを知る中で磨き合おうとする児童の育成ができると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

望ましい人間関係づくりを主体的に考えるため、参加型のアクティビティによる体験を中心とした人権集中学習を行う。その中で体験後のふりかえりによって「自分の考えを伝えること」「共感的に聞くこと」を意識すれば、多様な考えを認め、その中で自分も考え方が豊かになることを実感し、進んで友達とかかわろうとする意欲が高まり、磨き合おうとすることを実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

次の見通し１から３の取り組みを行えば、多様な考えを尊重し合う中で、自分の考えが豊かになることを実感し、磨き合おうとする児童を育成することができるであろう。

１　友達のよさを見つけたり望ましい人間関係を考えたりするアクティビティを行えば、相手を受け入れる態度への意識付けができ、相手の立場を尊重する態度や集団の一員としての自覚が生まれるであろう。

２　「伝えようとして話す」「わかろうとして聞く」というアクティビティを行えば、「自分の意見も他に認められる」という満足感を得られ、安心して意見を言える雰囲気が作られるであろう。

３　自分を向上させる「めあて」をもち「ピカピカ宣言」をし、その成果を「ピカピカスピーチ大会」で発表すれば、友達とのかかわりの大切さを実感し、磨き合おうとするであろう。

IV　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　用語の説明

ア　「参加体験型」とは

意識化されていることを行動化させるために有効な学習方法で、「アクティビティ」といわれる活動を通して行われることが多い。本研究では、知識としてもっている人権尊重の心や道徳心など内面的なものを実際の行動として表すところまで体験するので、実践意欲への重要な動機付けといえる。４～５人グループによる話合いでは、全員が意見を出せる状況が想定でき、一つの課題に向かって一人ひとりが主体的に考えていくことができる。また、ゲーム感覚で参加できるアクティビティもあり、楽しみながら自分たちの行動を考えることができるという利点もある。

イ　「磨き合う」とは

自他の考えを比較・総合することによって、互いに高め合うことと考える。授業においては、多くの意見を出し合うことにより多様な考えを知り、自らの考えを明確にしていくこと、日常生活においては、友達とのかかわりに関心をもつことによりお互いが認め合い、友達から学んだことを自分も生かそうとすることと考える。この「磨き合い」の中には、「他者理解」「真実を見抜く力」という人権教育上欠かせない要素が含まれている。

ウ　「アサーショントレーニング」とは

相手の人格を尊重しながら自分の考えを伝えるという手法である。同情や同感ではなく、違った価値観でも否定せず、相手の価値観を共感的に理解しながらコミュニケーションをとる学習である。

エ　「ピカピカメモ」「ピカピカチェック」とは

「ピカピカメモ」は、体験的な学習後のふりかえりカードで、主に感じたことや気づいたことを自由に書き込むのものである。「ピカピカチェック」は、話す・聞くことに関連したいくつかの項目についての自己評価で、一日の学校生活をふりかえって翌日への意欲付けを図るものである。

オ　「ピカピカ宣言」とは

人権学習で学んだことを通して自分を向上させるめあてである。どんなところを磨いていきたいか、そのために努力することは何か、実践できるように応援してくれるのは誰かなどを明記する。自分の努力と友だちの協力によって、ステップアップする自分を実感できる。

(2)　全体構想図（図１）

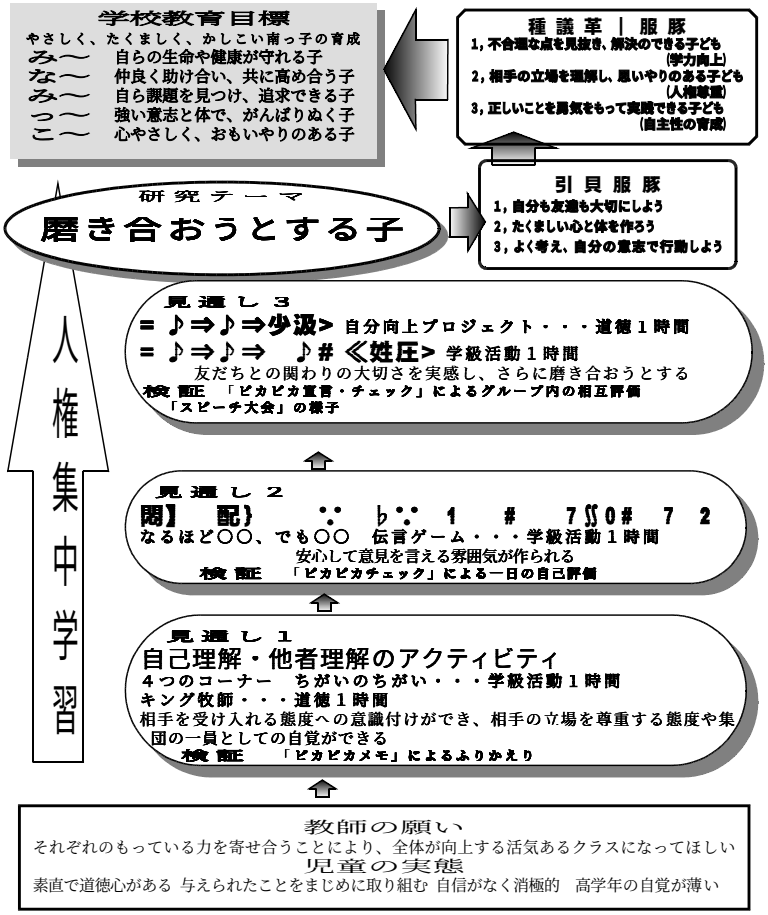


図１　全体構想図

2　実践の概要及び結果と考察

結果の考察にあたっては、実践前後のクラスアンケート、「ピカピカメモ」、抽出児Ａ男の様子を中心に行う。

抽出児Ａ男は、活発で発言力や行動力があり、学級の中での存在感が大きい。しかし自己否定的でなげやりな態度になってしまうので、本来もっているリーダーとしての力が良い方向に発揮できない児童である。

(1)　相手を受け入れる態度への意識付けができ、相手の立場を尊重する意識や集団の一員としての自覚ができたか。（見通し１）

ア　実践の概要

「朝の会」を利用して資料１のようなアンケートを行い、クラスの抱える課題を出し、これを基本としてクラス全員で解決していこうという確認からスタートした。ある質問に対して自分の考えに近い「４つのコーナー」に分かれるアクティビティでは、自分の思った通りに移動できたか、友達と自分の考えを比較できたか等、自分の姿を確認した。あってもいい違いか、あってはいけない違いかを考える「ちがいのちがい」というアクティビティでは、自分の意見、グループの意見、全体の意見を照らし合わせる学習をした。

資料1　アンケート「クラスの人は？」

	はい	やや はい	やや いいえ	いいえ
みんなとの約束を守る				
みんな仲良しだ				
みんなと協力し合っている				
だれにも親切な気持ちで話す				
自分の良い所・悪い所を知っている				
自分勝手をしない				
だれでも助けてあげる				
他の人の意見を聞く				
だれに対しても仲間はずれにしない				
みんなの立場や気持ちを考える				

イ　結果と考察

クラスアンケートの結果では、「だれに対しても仲間はずれにしない」「だれでも助けてあげる」「自分勝手をしない」「だれにでも親切な気持ちで話す」という４項目についての評価が低かった。グループでのブレーンストーミングは、「クラスの課題を見直すために一人ひとりができること」を主体的に考えていくことができた。資料２は、ブレーンストーミングで出されたものを全体でまとめたものであるが、「自分」という言葉が目立つ。解決するには人の力に頼るのではなく、自分からが大切だということが、グループで話し合ううちに自然に理解できたといえる。

資料2　クラスの弱点を見直す

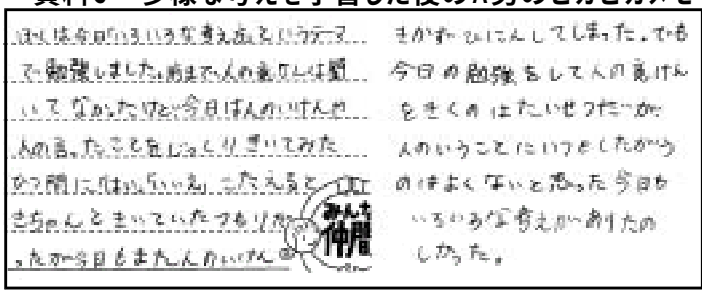
○遷汚¢＋　　´｝】″¢
自分から声をかける　悪口を言わない
○≠　♂▽珊〉∴…《　″¢
放っておかない　いやがらない
○考芭暫混　　´｝】″¢
自分自身を押さえる　相手の話をよく聞く
○取除″夏港＜♂閥】″¢
言葉遣いに注意する　自分は悪口を言い返さない

多様な考えを知るアクティビティとしては、まず「４つのコーナー」で「私は幸せだ」などの質問に対して、自分の考えに近い答えの場所に移動したが、質問ごとに体を動かし楽しい雰囲気の中でリラックスしながら自分の考えを決定していた。このアクティビティは全員を主体的に動かすという意図があったのだが、「友達の意見に合わせて動いてばかりで自分の考えがなかった」という感想の児童が１名いた。この児童はゲームの中でさえ自分の意志を示せなかったといえる。しかし「自分の意見も大切にしなければ」と感想をまとめているのを見ると、主体性の弱い自分に気づいて反省できたという点では評価できる。その他に「いつも嫌われたくないのでつい人の言うとおりにしてしまった」と感想を書いた児童がいたが、アクティビティを通して日頃の自分を振り返ることができたのだと考える。自分の意志に反しても他を受け入れない閉鎖的な仲間関係を維持しようとするこの時期の児童にとって、この気づきができたことは効果的なアクティビティだったといえる。

「ちがいのちがい」というアクティビティでは、「高校生の兄は11時に寝るが、小学５年生の私はしかられる」などの話題を、まず一人で考え、話し合う中でグループとしての考えをまとめ、全体に発表した。「答えがないからおもしろい」「一人ひとり考え方が違うから、自分の考えを押しつけるのはやめようと思う」「似た考えでも全く同じは一人もいないので驚いた」という感想から、それぞれの意見が少しずつみな違うことやそれを認めながらかかわることが必要であることを実感できたと考えられる。このことから、クラスという集団において認め合うことや尊重し合うことの大切さを意識できたと判断できる。

資料３は学習後のＡ男のふりかえりである。自分を客観的に見ていて、人の意見を聞かなくてはいけないと思っていてもできないことを認めている。これまでも彼は自分のマイナス面を冷静に判断できたのだが、自己否定のみにとどまりそれを改善しようとする態度へはつながらなかった。そこでＡ男の自尊感情を高めるため、「いつも人にしたがってばかりではいけない」という自分の確固たる意見が述べられていることを学級で紹介し、少しでも自分に自信がもてるよう励ました。すると、その後の道徳の授業（キング牧師）では活発に発言し、「差別と聞いただけで心が痛くなる。ぼくもキング牧師のような人になりたい」という前向きな考えになってきた。

資料3　多様な考えを学習した後のＡ男のピカピカメモ



(2)　自分の意見が認められるという満足感の中で安心して意見を言える雰囲気が作られたか。（見通し２）

ア　実践の概要　（アサーショントレーニング）

言葉を一切使わず順番に並ぶ「バースデイライン」によって、伝えようとする気持ち、分か

ろうとする気持ちの大切さを確認した後、「伝言ゲーム」によって事実が変化して伝わる様子を体験した。次に自分の意見を言うアクティビティをグループで行った。身近なテーマを提示し、これに対して自分の考えを言い、聞く側は否定的な反論をせず、「なるほど○○、でも○○」というように一旦受け入れてから自分の意見を言うアクティビティをグループで行った。

イ　結果と考察

「伝言ゲーム」によって正しく伝えることの難しさを経験した。簡単な文章でも多くの児童を介すうちに違った事実として伝わってしまうことを実感でき、真実を見抜くには自分の正しい判断力が必要であることも確認できた。アイスブレーキングとして行った「バースデイライン」で、伝えるために心をこめることを体験した後なので、資料４に示すように言葉のもつ重みをより感じることができた。さらに学習の補足として「事実か意見か」というプリントの練習問題をし、「自分に伝えられたことが、事実か誰かの意見かを自分で判断することが大切」ということを確認できた。

資料4　伝言ゲームのピカピカメモ

- 自分で人に話すとき、うわさ話では正しく伝わらなくてこわいので「それは本当のこと？」といつも考えたい
- 見てもいないのにうわさを流すのはよくないと思った
- 意見なのに事実のように広めるのはよくないと思った
- 見てないことを勝手に決めつけて言うとへんなうわさなる

４人グループで「春・夏・秋・冬」の中でどれが一番いい季節と思うかを話し合うアサーショントレーニングでは、自分の考えを伝えることに苦手意識があり、なかなか円滑な話合いにならなかったが、「絶対否定しないで聞く」という指示のあとは活発な意見交換になった。「なるほど秋は紅葉がきれいですね。でも、落ち葉のそうじが大変だから私は春の方がいい季節だと思います」というように、基本的な形式に従って穏やかな口調で意見交換をしていた。資料５に示したように、話し、聞くことの良さを実感している様子がよくわかる。否定されないということで、聞いてもらえるという安心感ができ、言い終わったあとの満足感を味わえた。これはアクティビティの中の感想だが、日常生活でもこうした態度が個々に現れれば、よりよい人間関係が築けることが再確認できた。

資料5　話す･聞く体験のピカピカメモ

- 自分がどう思っているかを伝えられるとうれしい
- 否定されないとわかっていると、安心して言える
- 今まで人の意見に合わせて自分の気持ちにうそをついていた
- 違う考えだからといって仲間はずれにされないんだとわかって安心した
- 「たしかに、なるほど」をつけるといいクッションになり、けんかにならないと思った
- 「たしかに」と言われてから直され、なっとくした

資料6　A男のピカピカチェック

資料６はアサーショントレーニングを学習した日、帰りの会で行ったＡ男のピカピカチェック（一日のふりかえり）である。聞くことに関してはまだ反省の余地があるが、話すことに関しては、積極的にグループ活動をしていた様子がうかがえる。さらに、「ちゃんとするのはむずかしい」という感想から、思うようにはいかないが努力しているＡ男の葛藤がわかる。明日への課題を見ても、決してなげやりにならず前向きに考えていることがわかる。

資料7　1週間のピカピカチェック

（3）　友達との関わりの大切さを実感し、さらに磨き合おうとしたか。（見通し３）

ア　実践の概要

聞くこと、話すことを生活の中でも心がけることを確認し、資料７のような「ピカピカチェック」を１週間行い、自分の磨きたいことを表明する「ピカピカ宣言」をした。５日間の集中チェックで各

自の宣言したことが達成できるようにグループ内で励まし合い、一日をふりかえって努力できた友達に星シールを貼った。実践後、まとめとして「ピカピカスピーチ大会」を行い磨かれた様子を発表した。

イ　結果と考察

ピカピカチェック期間を観察すると、今まであまり意識していなかった友だちの良いところを探すようになったり、授業中の挙手が増えたり、係活動を積極的に行ったりという効果が現れた。「ピカピカチェック」の中に自らの行動をふりかえるだけでなく、友達の行動にも目を向ける項目があったため、各自が主体的に自他の一日を振り返ることができたのだと考える。一日の学校生活の最後に、自分自身を落ちついて反省する時間を確保することは、翌日へつなぐために有効であったと実感した。

自己評価が甘い児童もいたので、「ピカピカ宣言」をするにあたっては「心のノート」を活用した道徳の授業や、グループのメンバーや家族の意見を聞く機会を設定し、自分を冷静に見つめる時間をとった。これにより、「欠点を直そう」という宣言、「長所を伸ばそう」という宣言など、自分なりの「めあて」を考えることができた。５日間のグループチェックにより、お互いに励まし合い注意し合う姿が見られるようになり、それぞれのグループが盛り上がって一日のふりかえりをしていた。星シールを貼ることが翌日への意欲付けになっていた。

まとめとして行った「ピカピカスピーチ大会」では、すべての児童が１分間に自分の思いを真剣に伝えることができた。そして自分が向上したことを発表するだけでなく、友達からの励ましや、真似したい友達の行動を紹介した児童も多かった。また、友達から声をかけられたことに対して、「感謝」「ありがたい」「～のおかげ」などという言葉を使っていたのは、かつては人の注意を受け入れらなかったが、共感的に聞く学習を経験したことにより素直に受け止められるようになったのだと考える。また、いかに友達との助け合いが大切かをも実感できたと判断できる。１時間のスピーチ大会であったが最後まで集中できたのは、各自の発表内容が自分を含め多くの人にかかわっているので、興味深く聞き入ることができたのだと考えられる。

Ａ男のピカピカ宣言は「自分勝手をしない」であり、「グループのみんなに注意してもらった。何度か失敗をくり返したが、これではだめだと思い、みんなを呼びかけて外で遊ぶようにした。みんなが外で遊べるようになり、これからもそうしたい」とスピーチをした。実際、それまで休み時間に外で遊ぶ児童は少なかったが、Ａ男の呼びかけによって男子全員がサッカーやドッチボールをして過ごすようになった。同じグループの児童はＡ男について、「Ａ男君が誘ってから、みんなが元気に外で遊ぶようになった」「Ａ男君はグループ全員の宣言をよく知っていて、僕が忘れそうなときすぐ教えてくれる」とチェックしていた。これまでＡ男は発言力があるあまりに、クラスの誰からも忠告を受けたことはなかった。規則からはずれたことであっても、黙認される傾向にあったので、せっかくリーダーの資質があるにもかかわらず良い面での力が発揮できないでいた。今回グループで宣言をチェックし合ったことで、自尊感情が乏しく自己否定的であったＡ男は、良くない行為を周囲に指摘され、自分も心の中で葛藤しながら自分勝手を直そうとし、リーダーシップをとるという自分の良さを生かそうとするようになったのである。Ａ男に対する力関係のバランス

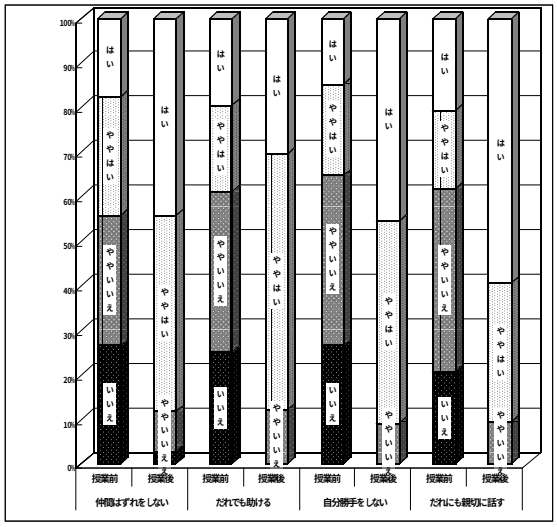


図2　クラスの人は？

が改善されていく手がかりとなったといえる。

グラフ１でわかるように、人権集中学習をする前に低かった項目も、授業後の調査ではクラスを良くしようとする意識が広がり、一人ひとりがかかわり合いを大切にしようとするようになったと感じられる。

また、日記では、友達との関係がうまくいかない時、「勇気を出して話しかけた」「私からあやまってみた」など、自ら解決しようとする姿が見られた。これは以前には見られなかったものであり、人権集中学習を通して身に付いた力であると考える。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

○ 参加体験型のアクティビティを経験することにより、クラスのいろいろな友達と触れ合うことができ、特定の仲間以外とかかわることへの抵抗感が減った。そして、多くの友達の良さに気づくことができ、お互いに認め合おうとする意識が生まれた。

○ 話す・聞くトレーニングを通して、自分の考えを持ち相手に伝えようとできるようになった。学習面でも効果が上がり、授業中の反応や挙手が積極的になりグループ作業の時など発言力のある一部の児童に左右されるのではなく、相談しながら活動するようになった。

○ 「ピカピカ宣言」でお互いにチェックし合うことは、個々の力関係の優劣をなくしていった。それまで注意しないでいることが友達関係を安泰にしていた部分があるが、注意し励ますことこそ大切な友情であることが理解できた。

2　今後の課題

「ピカピカスピーチ大会」では半数以上の児童の言葉に「これからも宣言したことを忘れずに自分を磨きたい」という内容が含まれていた。この意欲が継続できるよう、定期的にふりかえりの場面を設定していきたい。また、クラスの中で自分の考えをはっきり表現できる力が付いたので、学習のあらゆる場面で発揮できる授業展開を考える必要がある。

Ａ男については、良い所を周囲の友達や教師から声をかけ自尊感情を高め、良きリーダーとし活躍するよう励ましていきたい。

〈参考文献〉

・落合 良行 編著 『小学５年生』 大日本図書(2000)
・滝沢 武久 著 『話し合い伝え合う子どものコミュニケーション活動』 金子書房(1999)